

小江戸川越アート散歩+アートマップ制作

2009年11月15日
アート散歩講師: 椎橋次郎(川越市立美術館) / 草野律子(アルテクルブ)

クリックすると拡大します

時空の迷路へようこそ

国内外より25名のアーティストを迎えて開催されたアートイベント「あるってアート2008」から2年が過ぎました。このアートイベントは、「まち」のあちこちにインスタレーション型のアートが出現し、市民や観光客がアートマップを手に見て歩き、時にはアートに参加しようというものでした。アーティストのまなざしはその地域固有のコンテキストを読み解こうと試み、日常生活の中で当たり前の風景である「まち」に新たな価値を見出し、作品を通して表現しました。

川越は城下町でした。旧市街の南端にある川越駅から北へたどると、駅付近とクレアモール商店街は平成と昭和の「まち」。それを抜けると、大正モダンの面影を残す「大正浪漫通り」。そして仲町から札の辻に至る江戸と明治の蔵造りの町並みが展開していきます。「まち」そのものが、オープンエアミュージアムであるとも言えます。

しかしこの「まち」の面白さは、このルートだけではありません。主な観光ルートから外れたところに、それぞれの時代の路地があります。市民の日常生活の香りが漂い、子どもたちが走り抜けた、駅

へ向かう車の通らない安全な近道であったり、季節ごとの花が咲き、時には自分だけのアートポイントや店を見つけたりする魅力的な場所となります。

アートマップが継続的に更新され、マップ片手に歩きながら、この「まち」の時空の迷路の中で、多くの旅人が遊び、自分だけの楽しみを発見することを願っています。

(草野律子 / アルテクルブ事務局)

心の糧

小江戸・川越を散歩する楽しみは、江戸文化をはじめとする明治、大正、昭和の文化が、現代建築の勢いに押し退けられそうになりながらも街角にしっかりと染み着き、その歴史の重なりを肌で感じられることです。歴史は人間の活動の経歴であり、文化となって「まち」に堆積していきます。人は経済活動によって糧を食し、生命を維持していますが、それと同時に心にも糧は必要です。心のやせた人を見かける時、感動が不足していると感じます。「まち」に潜在する文化と触れ合い、感動を得ることは心の糧となり、心豊かに生きることができます。それは人生の理想とも言えましょう。



普段、私たちの目はものを見ている時に、その本質を認識できないと本来の価値が観えず、それは感動にはつながりません。アートを道しるべに川越を散策して行くと、「まちのアート」は泉のように文化の魅力を湧き出させ、私たちの目を引きつけ、心を潤してくれます。美術館やギャラリーに展示するのは異なり、街中にアートを展示する時、アート作品には「まち」の文化を顕在化することが求められ、アーティストはその純粋で鋭敏な感性で「文化の泉」を掘ろうと試みます。

文化は歴史上の人間の知恵や感動の総体であり、既存の社会システムをリセットする力を内蔵しています。今を生きる私たちは、歴史が重層する川越の「まち」から未来を生きる心の糧を感じ、心豊かな日々を送りたいものです。

(小野寺優元 / SMF運営委員)



ミュージアムからつながる輪

多世代交流ワークショップ
「つながるつながるARTでココロ」
2010年1月24日 うらわ美術館 D室(視聴覚室)

《アートのわっ!》の関連事業が、入間、北浦和、川越、川口の各地で開催されましたが、その締め括りとして、うらわ美術館ではワークショップ「つながるつながるARTでココロ」が行われました。このワークショップは未就学児から高齢者まで、いろいろな世代のひとがコミュニケーションを図りながら、同じ造形活動に取り組んだものです。臨床美術のプログラムを実践し、臨床美術士として各方面で活躍されている小池ちかこさんを講師に招き、参加者の心の交流を目的として実施しました。

このプログラムは異なる世代どうしてペアを組み、描画材の青墨とオイルパステルによって一枚の画用紙に絵を描いていく活動です。はじめに、青墨を使って正方形の画用紙に一辺から一辺まで通る線で、「たのしい気持ち」と「がっかりした気持ち」をペアで交互に表しました。参加者の皆さんは互いにおしゃべりしながら、「たのしい気持ち」のときにはニコニコし、「がっかりした気持ち」のときには眉間に皺を寄せて、描かれた線にはおののけの気持ちが充分に表れていました。そして次に、その4本の線で構成された形に、ペアで順番にオイルパステルを使って色を入れていきました。線で囲まれたさまざまな形の中に、指やティッシュで色をこすりつけたり、重ねたりと思い思いの手法で、夢中になって好きな色を塗っていく皆さん。無邪気な笑顔がこぼれていました。完成後にはそれぞれの合作を、線と線がつながるように壁面に並べて貼り、全員で観賞会を開きました。意図的に描いたわけではないのに、面と面の形や色がつながる偶然に、誰もが驚きと喜びの声を上げていました。このワークショップを通して参加者の皆さんは、作品のみならず、心と心が「つながる」ことが実感できたようです。



世代を超えて「つながる」ことを目的とした今回のワークショップは、応募のしめきり後にも毎日のように問い合わせがあり、関心の高さが感じられました。アートを媒介として、いろいろな意味で人が「つながる」ことの心地よさや喜びを伝えられる、そのような活動を今後も展開していきたいと思えるワークショップとなりました。

(田島均 / うらわ美術館)

